

# エー A ジー G ファイブ 5 だよ

在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業 (<https://ag-5.jp>)



## AG5テーマ2「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発とそのための教員研修のプログラム開発」

AG5 運営指導委員・日白大学専任講師 近田由紀子

2017年にAG5がスタートする以前から日本人学校に在籍する子供の多様化は進んでおり、日本人学校においても日本語指導が必要な児童生徒への支援が欠かせないものとなっていました。私たちは、表題のテーマを設定し、日本語指導が必要な子供たちはもちろんのこと、他の子供たちや先生方の成長も願ってプロジェクトに取り組んでまいりました。本稿ではこれまでの取り組みを振り返り、その概要と成果、今後に向けての期待などを紹介したいと思います。

国際結婚や長期滞在の家庭の子供など、日本語指導が必要な子供たちは、バイリンガル・バイカルチュラル人材としての活躍が大いに期待される子供たちです。

またこのような子供たちと共に学ぶことは、他の子供たちや先生方も多様な価値観を学ぶ絶好の機会となると考えてこのプロジェクトに取り組んでまいりました。

### 二〇一七年度からの経緯

二〇一七年度のAG5始動と共に、台湾の台北、台中、高雄の日本人学校が効果的な日本語指導プログラム

の開発に取り組みました。その成果は、『日本語補習クラスのための学習活動案集』台北日本人学校の実践から『在籍学級での日本語支援の視点を取り入れた授業づくりの手引き』台中日本人学校の実践から『高雄日本人学校における二〇一九年度の取組み報告資料』にまとめられ、AG5のWebサイトに掲載されました。

二〇一九年度～二〇二二年度は、台湾の三つの日本人学校の成果を発展させる形で、マニラ日本人学校を拠点に大連日本人学校と青島日本人学校が連携・協力して「総合学習型日本語指導」に取り組みました。

総合学習型とは、教科横断型の日本語指導、学級での多様な学び合い、バイカルチュラルの視点を生かした多文化共生の学校づくり等を含めた日本語指導です。詳細については、次にご説明します。

### マニラ日本人学校・大連日本人学校・青島日本人学校による先進的な取り組みへ

二〇一九年度以前より、マニラ日本人学校小学部では週一回放課後に日本語学級を開設して指導をしていました。また青島日本人学校では日本語指導担当教員による課外授業・個別指導・入り込み指導を行っていました。大連日本人学校では在籍学級で日本語の支援を行っていました。しかし、それぞれに指導内容や指導方法についてさらに改善できるのではないかという課題意識も持ちました。そこで従前の仕組みを生かしつつ、「日本人学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル人材育成のためのプログラム開発」というテーマのもと、各学校での指導内容や指導方法、校内体制の整備などの改善を含め、総合学習型日本語指導の先進的な取り組みに挑戦していただきました。

その結果、三校の取り組みには、おもに次のような共通点があることがわかりました。

- ・三校間の積極的な情報交換・交流
  - ・日本語指導担当の校務分掌への位置づけや学校体制の整備、校内研修との関連付け
  - ・対象児童生徒のきめ細かい実態把握と評価
  - ・「日本語と教科の統合学習」を軸にした日本語指導（日本語を教科の学習場面と切り離さずに指導する。）
  - ・具体的な日本語支援（体験的な活動や操作活動の重視。モデル文やキーワード等の提示。）
  - ・バイカルチュラルの視点を生かした授業実践（現地素材を使ったり、在留国と日本、両国の文化や価値観等について触れたりすることで、多様な価値観や広い視野から子供たちの学びが深まる。自己肯定感の高まりや自信につながる。）
  - ・日本語学級または日本語指導担当者、在籍学級担任・教科担任との連携
- そして、このような共通の取り組みに加え、各校ではそれぞれの地域や学校の特徴を生かした実践をさらに進めていきました。

マニラ日本人学校

日本語学級での教科横断型の先行学習による成果

小学部では課外に、学級担任が日本語指導の必要な児童に対して、国語、算数を中心に、各学年の実態に合わせて教科横断型の日本語指導に取り組みました。

週一回の指導でも、教科横断型の学習をすることによって、在籍学級の学習と関連する内容を多く取り入れることができます。また在籍学級での学習にのぞむ前に、体験的な活動も取り入れながら先行して学習することで、内容への関心・意欲が高められました。

このような先行学習によって、在籍学級での学習参加も促され、理解力の向上や内容の定着も図られたそうです。

日本語学級における教科横断型のカリキュラムマネジメントによる先行学習は、担任の先生方という利点を生かして、子供の実態に合わせて無理なく行うことができたと考えられます。

在籍学級での日本語支援・バイカルチュラルの視点を取り入れた授業

一方、在籍学級の授業では、日本語学級（先行学習）とのつながりを

意識した学習を実践しました。日本語学級での学習経験を踏まえた授業展開や日本語支援を積極的に進め、子供たちが在籍学級でも安心して授業に取り組める工夫があちこちに見られました。

また、現地語が得意な子供による現地の方へのインタビューを取り入れたり、日本とフィリピン両国の文化に触れることで課題を自分事として深く考えたり、学んだことを実践へつなげたりと、子供たちが活躍する場も次々と広がりました。

コロナ禍により今もマニラ日本人学校ではオンライン授業が続いています。上記のような取り組みは、各学年の先生方、全学年の先生方のチームワークがあつてこそ成り立っています。

実践成果は、『日本語学級・在籍学級での教科横断的な日本語指導』マニラ日本人学校の対面・オンライン授業の実践から』という冊子にまとめられ、Webサイト <https://ag5.jp/report/theme2-2/study/detail/133> にも掲載されています。

この冊子は、学習活動計画と評価を中心に児童の成果物や教材の紹介もあり、参考資料として国内外で活用されています。

大連日本人学校

子供たちの自己肯定感を高める学校・学級づくり

校務分掌に位置づけられたコーディネーターが日本語指導の課題を校内研修や研究主題と関連付けたり、研修推進委員会を効果的に活用したりして、学校全体の教育実践を促しました。

校内の研究主題と関連させることで、支援的な学校風土という基盤のもと、子供たちの自己肯定感を高める学校・学級づくりができたそうです。

以前の大連では、日本語指導が必要な子供たちは、学年が上がるに連れて消極的になる傾向が見られたそうです。違いを受け入れ互いに認め合い、子供たちが自信を深められるような支援的な学校・学級にだけ支えられていることでしょう。

個別の指導計画と評価

DLA 語彙チェックや、「特別の教育課程」参考資料に示されている「目標項目」の活用、表現に関する意識や自己肯定感についてのアンケートの実施により、個々の実態把握やゴールが明確になったそうです。

学級担任が個別の指導計画を作成し指導に生かすと共に、学校全体と

して小学部・中学部の九年間の発達を見通しての実践の図式化も行って共通理解を図っていました。

また評価には、振り返りなどの成果物を生かしたポートフォリオ、授業へ参加する様子（日本語力・積極性）の記録、児童生徒の自己評価も活用しています。

今後は、より丁寧で効果的な指導や評価ができるよう、特別支援教育との連携も図りながら進めていくそうです。

表現活動を重視した在籍学級での日本語指導

確かな日本語力の定着・子供自身の良さを発揮する学習活動として、特に表現活動に力を入れているのが大連日本人学校の特徴です。表現支援としてのモデル文の提示や、教え合い・認め合う学習活動の設定に加え、ICTの活用やコミュニケーションスキル、ソーシャルスキルなども取り入れています。

青島日本人学校

多文化共生の学校・学級づくり

日本語指導担当教師が校務分掌に明確に位置づけられると共に、テーマを学校の校内研修と関連させて、全教職員で「多文化共生の学校づくり・学級づくり」に取り組んでいる

のが青島日本人学校の特徴です。

在籍学級担任は、多文化共生や日本語指導の視点を入れた学級経営案を作成しています。全児童生徒を対象にしたアンケートでは、日本語指導の基盤としての支援的な風土ができていくかを把握したり、生活面や学習面での日本語に対する困り感を把握したりしています。

### 多様な学び合いを支える日本語指導

「課外の日本語教室の指導」、「取り出しによる個別の日本語指導」、「在籍学級での入り込み指導」により、在籍学級での多様な学び合いができるよう支援しています。

学習内容は、日本語指導担当教師が在籍学級担任や教科担任と相談して決定し、「日本語と教科の統合学習」を中心にしてICT機器も積極的に活用しています。

さらに「個別の指導記録」として学習活動や指導内容を日本語指導担当者が毎時間記録し保存することで、継続して指導する効果を上げています。

また保護者との連携も大切に、日本語教室入級前の事前説明、個別懇談時を利用しての日本語指導の面談も実施しています。

### バイカルチュラルの視点を取り入れた授業

子供のルーツのある国からきっかけをつくる授業が効果を上げました。例えば、ルーツのある国の絵本や文化の紹介などです。

青島日本人学校には中国だけでなく、韓国や他国にルーツを持つ子供がいます。その多様性を生かして授業を展開しました。日本と諸外国の文化を比較し共通点や差異点を探る学習は自分のルーツとの関わりがあることから、より主体的に取り組んだそうです。

またオンライン交流として、日本の小学校との交流、企業訪問、卒業生との交流などを通して視野を広げていました。

実践成果は『多文化共生の学校づくり』青島日本人学校の実践としてまとめられ、Webサイトに掲載されています。

<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/128>

### オンライン日本人学校教員研修とネットワーク

これまで紹介してきた各校の実践は、個別のアドバイスではうまくいきません。八月号のこの欄で詳細をお伝えしたように、教師のニーズに応じた研修が必要でした。

日本語指導については、国内の外

国人児童生徒等教育でも同様ですが、先生たちは基本的な考え方やノウハウを学ぶ機会を持っていないのです。ですから、赴任前、赴任直後、赴任中、それぞれの段階で、計画的に研修や情報交換会を実施しました。

先生方は、実践しながらも「これで良いのか、大丈夫か」と常に不安を抱えています。コロナ禍においては、まさに試行錯誤の連続でした。このような状況において、他校の実践を知ったり、悩みや課題を共有したりできることが大きな強みになったようです。

マニラ、大連、青島の日本人学校は常に情報を共有して共に進もうとしています。オンライン研修会によって日本人学校教師の輪も広がっています。

日本語指導担当は一人体制のところが多く校内で孤独感を感じやすいのですが、オンライン研修会を抛り所にして頑張っているという声も聞きました。様々な理由はあっても、先生たちのネットワークが力になっていることを感じます。

### 今後に向けて

最終年度の成果として、「汎用性のある日本語力向上プログラム」を提案します。これはマニラ、大連、

青島の日本人学校が実践した成果のうち、情報交換会等のアンケートも参考にしながら、他の日本人学校にも使えるような体制づくりや、カリキュラム、連携・協働の仕組み等を紹介するものです。

十一月二十七日、マニラ日本人学校主催の合同研究会にて、提案します。合同研究会では参加者と意見交換をすることで、「汎用性のある日本語力向上プログラム」をブラッシュアップする予定です。また当日は他の日本人学校や国内の中学校の取り組みなども紹介します。ご関心のある方はぜひご参加ください。

<https://ag-5.jp/report/theme2-2/study/detail/132>

今後、「汎用性のある日本語力向上プログラム」や広がりつつある教師のネットワークを活用しながら、各地の日本人学校でより魅力的な実践が行われることを期待しています。また現在赴任中の先生方が、帰国後はそれぞれの経験を生かして国内でのグローバル人材育成のリーダーとして活躍されることを願っています。